図表 5- 8　昭和 60 年以降（1985 ~）の肝炎の予後に関する主な報告

文献番号	年	出所	内容	文献の種類	文献の性質	予後の重篤性
5-8-1	1986 (S61)	吉野泉（国鉄中央保健管理所）ほか 「輸血後肝障害の長期追跡調査研究」 肝臓 1986; 27(12); 1665-1668	輸血後肝障害は非A非B型肝炎ウイルスによるものと推測し、輸血後非 A 非 B 型肝炎の発症をみた症例の肝疾患予後は極めて不良であると推測。	学	原	●
5-8-2	1986 (S61)	大林明（国立療養所東京病院内科） 「輸血後肝炎」 Progress in Medicine 1986;6(5);15-20	NANB 型輸血後肝炎は長年月の経過で肝硬変、肝細胞癌に進展する頻度が意外に高く、この発生を予防できない限り、将来においても受血者は肝硬変、肝細胞癌の高危険集団であることを示唆すると述べる。	他	レ	●
5-8-3	1987 (S62)	古田精市（信州大学第 2 内科）ほか 「非 A 非 B 型慢性肝炎の長期予後」 犬山シンポジウム記録刊行会 編『第 15 回犬山シンポジウム　ウイルス肝炎のトピックス―発生機序・転帰・腫瘍マーカー』中外医学社, 1987. p.53-58	著者らの成績では非 A 非 B 型慢性肝炎は B 型慢性肝炎と比較し、肝硬変、肝癌への進行が緩徐で組織学的に改善することが比較的まれであること、非 A 非 B 型慢性肝炎の長期予後、とりわけ肝硬変、肝癌への進展増悪に関してはいまだに統一した見解の一致をみていないことを記載。	他	レ	△
5-8-4	1988 (S63)	上村朝輝（新潟大学医学部第 3 内科）,渡辺俊明, 樋口庄市 「非 B 型輸血後肝炎の長期予後」 肝胆膵 1988;17(5):979-983	非 A 非 B 型慢性肝炎は、慢性肝炎としての病変が長期持続することが多く、そのうち 20%前後が肝硬変へ進展するものと考えられることを記載。	他	レ	●
5-8-5	1988 (S63)	市田文弘（新潟大学第 3 内科）ほか 「非 A 非 B 型慢性肝炎の転帰に関する検討」 厚生省特定疾患難治性の肝炎調査研究班 『昭和 62 年度研究報告』 1988. p.16-18	非 A 非 B 型は、B 型に比べて、改善例が少なく不変例が多い傾向が認められ、組織変化の進展が緩徐で、長期にわたり不変であるものが多く、改善する例が少なくないことが特徴であると記載。	厚	原	○
5-8-6	1990 (H2)	西岡久壽彌（日本赤十字社中央血液センター） 「輸血後肝炎・肝癌予防のアプローチ」 診断と治療 1990;78(2);179-187	著者らの調査結果により、急性非 A 非 B 型肝炎→慢性肝炎→肝硬変→肝癌の一連の疾患が抗 HCV 抗体陽性と関係があることが明示されたと結論し、昭和 63 年度の日本の肝癌の犠牲者 2 万 3000 人のうち、HBV 持続感染者は約 6000 人、HCV 持続感染者は 1 万 4000 人と推定され、一般国民の HBV キャリア率 2%、HCV キャリア率 1.2%とすると、HBV キャリアは 240 万人、HCV キャリアは 140 万人となり、そのうち 1 年間にそれぞれ 0.25%及び 1.0%が肝癌死していることとなり、HCV の方が肝癌死のリスクが 4 倍高いと記載。	他	レ	●